＜特集＞

座談会 東日本大震災から 11 年を迎えて

桜美林大学サービスラーニングセンター（以下、SLC）は、2011 年 4 月に開設されました。もともとこの年はセンター立ち上げの準備期間となる予定でしたが、前の月の 3 月 11 日に東日本大震災が起きてしまい、急遽 SLC は被災地への学生ボランティア派遣を行うこととなりました。

当初より、多くの桜美林生がボランティアとして被災地に足を運びましたが、このときボランティア活動に参加した学生たちが中心となって、震災を風化させないこと、また震災から見えてきた社会問題について考え解決のための行動を起こすことを目的に、学生団体「サービスラーニングセンター・ボランティア（以下、SLC-V）」が設立されました。

2022 年の今年は震災から 11 年を迎えます。今回 SLC-V の OG・OB、そして今現役で活動をしている在校生にお声がけし、東日本大震災から 11 年をふりかえって今思うこと、考え得ることを座談会で語ってもらいました（2022 年 3 月 6 日（日）Zoom で実施）。以下はその記録です。

SLC 林加奈子（以下、林）　皆さんこんにちは。今日はお集まりいただきましてありがとうございます。東日本大震災からまもなく 11 年を迎えるというところで、初めての試みなんですけれども、サービスラーニングセンター・ボランティア（SLC-V）の OG・OB、そして在校生にお集まりいただきました。今日はこの 11 年をふりかえって思うところをお話しいただければと思います。

では、まず自己紹介から一言ずつお願いします。何年入学、何学群で、今どんなことをしていますっていうことを一言ずつ言ってもらって、トークに入りたいと思います。では開くんからいきましょう。

大河原開さん（以下、開）　はい。2009 年に LA 学群に入学した大河原と申します。今は横浜市内の病院で看護師として働いています。よろしくお願いします。

山田峻行さん（以下、たか）　2011 年入学の山田峻行と申します。今は日中は通信制高校の指導員、サポートスタッフをしていて、夕方から塾で講師をしています。よろしくお願いします。

前田莉穂さん（以下、りほ）　2012 年入学、ビジネスマネジメント学群の前田莉穂です。今は通信会社の Web デザイナーとして働いています。よろしくお願いします。

前島一成さん（以下、一成）　2015 年入学の前島一成です。よろしくお願いします。今は羽田、大田区の方で、消防設備の施工管理の仕事をしてます。よろしくお願いします。

今西なず菜さん（以下、なず菜）　2019 年入学、リベラルアーツ学群 3 年の今西なず菜と申します。現 SLC-V の代表をやっております。よろしくお願いします。

羽尾みゆきさん（以下、みゆき） 2021 年度入学、グローバル・コミュニケーション学群の羽尾みゆきです。今は大学一年生です。よろしくお願いします。

林 はい、みなさまありがとうございます。2009 年入学から 2021 年入学と幅広いですね。
では、どなたからでも構わないんですけれども、今年で震災から 11 年を迎えるということで、今こういうことを思っています、考えていますというのがあったらぜひ共有いただきたいのですが、いかがでしょうか。どなたから行きましょう。

たか じゃあ、年功序列で開さんお願いします。

開 はい。最近やっぱりウクライナのことがあって、世界的にも不安定な状態で、その前にもコロナがあったり、色々と考えさせられることがあります。いくつかある中で、やっぱり思うのは、メディアの報道、震災のときもそうだったんですけど、メディアが流す情報を 100%信じちゃうっていうのがちょっと危ういなって感じてます。

実際コロナの報道でも、病院で働いてコロナの患者さんとも接する中で、メディアが流してる情報と、肌で感じる情報、自分が一個人として得て、経験した情報との開きがだんだんあるなって感じてるんですね。
だから、震災のときもそうだったんですけど、福島の原発の事故があったときも、専門家と呼ばれる人たちが事故に対して、今も YouTube とかで見れると思うんですけど、けっこうめちゃくちゃなことを初め言ってたんですよ。原発が爆発したとき、水素爆発したときに、爆発じゃないっていうことを言ってて。「意図的に放射性物質を外に排出しているから爆発ではない」っていう。事実と全く違うことを報道してた。メディアってけっこう感情を揺さぶるじゃないですか。今のウクライナもそうなんですけど。今もロシア側が原発に対して攻撃してるみたいなのもありますけど、やっぱ、そこはもうちょっと冷静に情報を・・・、冷静になれないのもわかるんですけど・・・、自分自身もやっぱり、日々そういう報道を見ててけっこう感情が揺さぶられちゃったりするんで。
でも、ちょっと一歩引いてその情報を自分なりに調べてみるとか、違う視点で見るっていうのは大事じゃないかなっていうのはありますね。

林 なるほど。ありがとうございます。震災のときもそうだったっていうのを言ってましたけど、当時もやっぱり自分が得た情報とメディアが流している情報の距離感みたいのを感じた？

開 そうですね。一例としては、うち BS も入ってたんですけど、地上波で出ているタレントとかテレビキャスターが BS の番組で言ってる内容が全然違くて。原発に関しては「やっぱり地上波ではこういうこと言えないけどね」って言ってて。「地上波で東京電力とかの批判はできない」って。あとは、震災が起きた後って原発に対する反対のデモって各地でいっぱいやってましたよね。後半にかけては国会前で色々やってたんでさすがに日本のメディアでも報道してたんですが、当初はイギリスの BBC とか、ドイツの公共放送の ZDF とか BS 経由で日本のデモの様子を見て。あれ？なんでこれ海外で報道してるのに日本では報道してないんだろうっていうのがあって。

林 なるほど。

開 あとは、実際に自分で初めて新宿の近くで行われたデモに行ったんですよ。それが数千人ぐらいけっこう集まってて。空にも報道関係のヘリが飛んでて。それでその日に家に帰って、これはもうテレビでやるぞと思って夕方のニュースを見てたんです。見てたら、日本人が台湾に震災の援助

をしてくれたお礼を込めて泳いでいったっていうニュースだけだった。それもすごいことなんですけど。そこじゃないんじゃないかなってそのときは思ったんです。

林　なるほど。メディアの偏りって、私もウクライナの件はかなりそう思ってるんだけど。メディアを 100%信じたらいけないというのはこの 10 年、確かに・・・、ありますね。どうでしょうか、皆さんは。今のところに重ねていただいてもいいですし。別のテーマに移って頂いても大丈夫です。

りほ　今の開さんの話に私も共感をしていて。最近、コロナ以外にも海底火山が噴火したり、ウクライナの件もそうなんですけど。火山の噴火のときは、3.11 以来日本全国でアラームがテレビ画面に表示されたりして、当時のことをちょっと思い出したりもしました。ウクライナのことも原発の話が出たり。あと、避難しなきゃいけない方々が避難先でどう暮らしているのかっていうところがスポットを当てられたりする報道を見て、当時の福島の、原発で住めなくなってしまって周りの地域に移り住んだ方々の報道とかも思い出したりして。直接震災の話ではないけれども、世界の情勢を見て、当時のこと思い出すことが最近多かったなとも思ってました。３月っていうのもあって、意識しているのかもしれないんですけど。

私が SLC-V に入ったきっかけが、親戚が岩手、大船渡の陸前高田出身だったので、その家が流されちゃったりとか、遠い親戚も亡くなっちゃったりしたことがあって。卒業してから、営業職経ての Web デザイナーっていうところで、 なかなか直接ボランティアに行くことはできなかったんですけど。毎年、できればなるべく震災が発生した時間には黙祷できるような形で意識しています。

ただ、親戚の方と何回か、ちょっと遠いのでなかなか会えてないんですけど、会うときに、色々話はするんですが、未だにその当時の話とかしづらくって。聞いてみたいなって気持ちもあるんですけど、ちょっと踏み込んじゃいけないのかなっていうところもあって。そのときでは終わらない後遺症とか心のしこりがいっぱいあるんだろうなって想像しちゃうと、なかなか踏み込めないなっていう部分があるので。

林　うん。

りほ なかなか自分が何できるってわけじゃないんですけど、いろんなこと意識して、心でも寄り添えたらなと思いつつも、どうして良いかなっていう 10 年でした。親戚でありながらもそういう経験をされた方との向き合い方に悩むなと思います。忘れちゃいけないなと思いつつ、でも自分何かできてるかなっていうふうに思ってしまう 10 年です。

林　うん。ありがとうございます。ご家族の方とは話します？

りほ　そうですね。特に３月とかはテレビの特集とかも増えてくるので。何が正しいのかなって思いつつも、やっぱり考えることは大事かなと思って。なるべくその特集を見たりして。どう思ってるみたいな話はしてます。

林　さっきね、転職の話も出たんだけど、職場の中ではどうですか。やっぱ３月っていう時期になると、一緒に働いている方も震災のことを考えるっていうふうになるのか、それとも東京の人たちは全然普段と同じみたいな。そこらへんのまわりとの温度差みたいなのはどうですか。

りほ　そうですね。前職では秋葉原が拠点だったんですけど、そのときに上司の方が震災で帰れなくなった話とかビルがちょっと壊れた話とかして。親戚もっていう方もいたのでそういう話はする

ことはありました。が、年々やっぱり話題が少なくなっていたなっていうような感覚でした。

林　月日がね、進んでいくにつれてっていうところなんですね。今りほが言っていた、この 10 年向き合い方をずっと考え悩んできたっていうのはお話からものすごく伝わってきました。他の方はどうでしょうか。

たか　はい。りほの話にもつながってくるんですけど、大学から離れて社会に出ると一般的に言われますけど、「社会に出た方が社会との接点がなくなる」っていうの、すごい感じてます。SLC-V って震災がきっかけで立ち上がったんですけど、フィリピンの洪水だったりとか、かなり全方位に対して社会的関心を持つメンバーが集まって、日頃から日常会話の中でその関心、さっきの開さんのメディアの話とか原発の話とか、日常会話のレベルでそういう話をずっと続けてたじゃないですか。募金活動したりとか、物販やったり情報を発信したりとかっていう具体的なアクションがあった。これはひとつの社会との接点、いろんなところの接点だと思うんです。

でも、仕事したりとか、私今 3 児の父なんですけど、子育てをしたりするとだんだんと自分の時間がなくなってくるという。その中でもおそらく社会に出てやってる人はいると思うんですけど、残念ながら職場では震災の話はまず出てこないですし、「ウクライナやばいよね」ぐらいの解像度でしか世界を見てない人たちってなると、もっとざっくばらんにみんなと、あの時代はいろんな話をできてたかなと思って。社会との接点がなくなってきてるなあっていうのは、大学を離れて思うことです。

林　今、この「社会との接点」ということばはキーワードだなと思いましたけど、他の方はどうでしょうか。あと、たかはずっと当時現地に入ってたじゃないですか。向こうで在学中にボランティアの受け入れをずっとスタッフとしてやってた。当時の現地の方々とのつながりみたいのはどうなんですか。

たか　今、年賀状のやりとりをしていて。コロナで行けなくなってしまったんですよ。本当は子どもがちっちゃいころに連れてって、自分「ささっこクラブ」っていう学童みたいなのをそこで作ったんですけど。「ちょっとお前ら、育ててやったんだから、うちの子と一緒に遊んで！」みたいなことをやりたかったりとか。

結婚式のときに、ささっこクラブのメンバーがビデオメッセージ送ってくれましたけど。そうですね、逆に今減ってますね。もっと昔は会ってましたし。このままフェードアウトしてしまいそうで怖いなあと思って。

林　うーん、うん。そうなんだ。やっぱ働く、社会に出てってなると、学生時代の関わり方とは変わってくるだろうね。それがさっきりほが言ってたこの 10 年、働く中で本当はもっと行きたいけど、遠いし仕事もあるしみたいなところでね、どういうふうに向き合っていいのかっていうところなのかなあ。うーん、なるほど。そうですね、ほかの方はどうでしょう。

一成　今のたかさんの話で言うと、俺も本当入社当時から感じていて。ただそれはなんて言うんですか、頭ではわかってた。要は、その前 SLC-V だったりとか、あと SLC のセンター長である牧田先生のゼミに自分は属していたので、かなり国際協力、社会問題に興味のある人たちがいるところで生活してしまったなっていうのは後から感じて。世の中の大半の人が社会に興味がないっていう

ことは頭ではわかってたけど、実感として持っていなかったから。もう常に毎日どこかに「今日のニュースはやばかったよね」って話せる人がいた。「そういえば誰々さんどうしてるかな」って話をできる人がいたっていうのはすごい貴重な時間だったって後から気づいて。
今、会社ではちょっとみんなを洗脳しつつ、前島ってこういうやつなんだなってことを刷り込んでいったがゆえに、ニュースがあると「あれどういうこと？」って聞いてくれるようになってきたりしたので、それはちょっと自分の中では「お！やったな」っていう感じがするんですけど。
本当に最初はちょっと苦しくて。なんて言うんですか。だから頭ではわかってるけど、本当にニュース見て、何かあったときに「これ見た？」みたいな話をしたら「え？何それ？」って言われたときに「はっ・・・」て思って・・・。要は、今の自分と多くの人たちとの距離感を感じてしまうときすごいさみしくなるんです。

でもそれって本人たちが悪いわけでもないし、 日本の報道の仕方のせいだったりもするし、興味を持たせるような教育でもなかったなあとは思うんで。ただ、俺たちは触れる機会を与えられた。先輩だったり先生だったりとか、あとは SCL-V であったりとかっていうところでちゃんと触れる機会をいただいたので、それをちゃんと発信していかなきゃなってのはすごい思うんで。
ただ、それはすごい苦しい作業なので、やっぱどこかでそういうプラットフォーム、みんなで話し合える場、集まれる場とか、不特定多数の人が出入りできるようなところがあるとより良かったのかなと。そういうとこをつくっていく必要がもしかしたら昔あったのかなっていうのは今になって思う。
たかさんが言ってた、社会と関わる機会が減ったっていうことでは、社会と関わることが好きだったり楽しかったりする人はさみしい思いをしている、そういう先輩も多いんじゃないかなとか思ってしまいますね。
あと、開さんが最初の方で言っていたと思うんですけど、情報を得ることについては、SLC-V とかこういう学生団体の良さって、やっぱ足を運んで、現地の人と出会って、自分が今まで知ってた情報とすり合わせることができるから、「ここちょっと食い違ってるな」とかっていう発見があるんですけど。今大学生のなず菜やみゆきちゃんたちはきっとなかなか行けなかったりしてすごいもどかしい思いしてると思うので。
今までは、インターネット媒体で受信した情報と、自分たちから足を運んで手に入れてくる情報と両方あったと思うんです。自分は福島にゼミでよく行ってたんで、その人たちとは連絡を取ったりはするんですけど。直接会うとか、ニュースの情報とかっていう以外の、もうひとつ別の関わり方をつくっておけば良かったなっていうのはすごい思っていて。たとえば、現地の方から野菜とかをいただいて、復興支援カフェで食べ物を提供していたあの形はとても良かったなって。たくさんことばを交わさなくても「覚えてるよ」「想ってるよ」って現地の方に伝わるものだったかなと。
こういう時代になって、なず菜たちは今苦しんでいることかもしれないし、これからどうしていきたいのかなっていうのは今のメンバーに聞いてみたいなあと思ってます。

なず菜　そうですね。私も一成さんと同じで牧田先生のゼミに入っているんですけど。国際協力のゼミで社会問題に興味がある人たちが集まっているので、例えば日本のことでも選挙の話とかする機会がすごいあったんですよ。でも、ゼミ以外の友だちに選挙の話をしたら「あ、行くんだ。すごいね。」みたいな感じで言われて。ギャップっていうか、そういうのを感じて。「あ、行かないことが前提なんだな」っていうふうにちょっと悲しく思ったりとか。社会問題を取り上げて普通に日常会話で話すことのハードルが上がっているというか。そういうふうに感じているところはあります。

SLC-V で今フィールドワークとかも行けないし、現地での活動はまったくできてない状況なんですけど、私たち自身も震災の面で知らない部分がいっぱいあるので、こういうときだからこそまず調べる・学ぶっていう期間にしようっていうのと、身近なところからでも防災意識を上げてもらえるような活動をしようっていうことで、今年度 1 年間は子どもを対象にした防災教室を開いたり、その前だとアイリンブループロジェクトについてのオンライン講演会を開いたりしました。

やっぱり、さきほど先輩が言ってらっしゃったように、メディアを鵜呑みにしちゃいけないなあっていうふうには思ってるんですけど、今はメディの情報を見てしか行動ができない部分もあるので。行動して聞きに行って自分で実感して、目で見て耳で聞いてっていうのができない状況なので「はぁ」ってなってます。

林　うーん。ね。先輩方、今のなず菜の話を聞いてどうですか。

たか　今、自分の当初の、SLC-V で活動してたときを思い出してたんですけど、ボランティア行ってるって言って「えー、えらいね」って言われて距離感を感じたっていうのは多分あるあるだと思うんですよ。別に立派なことをしようとしてやってるわけではなくて、純粋に自分がおそらく楽しかったりとか感動したりっていう、自分のためにっていうベクトルで活動しているメンバーがほとんどだったと思ってます。特に SLC-V は。やらされることって一つもなかったし、なんとなくやってたことも一つもなかった。てなったときに、「楽しいんだぜ」って自分たちやってて、それに対して「えらいね」って言われた瞬間に、なんか「あなたと私は違いますよ」ってシャッター降ろされた感覚になるときがある。これは多分選挙の話とかもそうなんですよね。おそらく「選挙行ってんだ。すごいね。」でガシャン、みたいな。これってどうなんでしょうね。他のメンバーも感じたりとか、現役のなず菜さんとかどうでしょうか。

りほ　確かにそうですね。「ボランティアえらいね」っていうのはありますね。会社の人とか話をしてて特に。「学生時代何したの？」っていう話題で、やっぱり SLC-V での活動が一番印象に残っているので、その話とかをすると「へー」っていう線引きを感じるというか、突っ込まれない。それ以上「何々？どういうことしてたの？どういうことを感じたの？」っていう踏み込んだ話をそういう方々とはできないなって感じを受けることは多々ありました。なんか「へー」で終わっちゃう。

一成　しかも棒読みの「へー」ですよね。なんですかね、興味とか関心とか感情の無い「へー」みたいな。

りほ　「あーそうなんだ」って言って、対話にならないなって感じることがありました。

林　それは過去形？今も？

りほ　今もわりとそうかもしれないです。中にはもちろんいますけどね。

一成　でも、ある意味で言えば、だから俺たちはきっとこういう活動をしてたんだなとやっぱ思うんですよね。そういう人口が少ないから。だから、誰かが表立って「こんなことあるんだよ」ってことを言ったりとか、現地に行ったりとか、やっぱみんなができるわけじゃないと思うので。良し悪しはあると思うんです。「ここは知ってなきゃダメだよ」みたいなポイントは時々ありますけど、でもそれをちょっとぐっと抑えて、代わりに俺が知ってるから「聞いてみる？」ぐらいなニュアンスでいると自分もつらくないし、相手も「何だよ、押しつけがましいな」ってならなくて済むのかなとか思って。どう共存していくべきかとか、知ってほしいしいことをどうやって知ってほしいか。それこそ営業みたいなことかもしれないんですけど。

林　みゆきちゃんはどうですか。今まで聞いてきて。

みゆき　やっぱり「ボランティアはすごい」みたいなイメージができていて、友だちに「一緒にボランティアやろうよ」って言っても、「えーなんで？」って言われて。「ボランティア＝すごいこと」みたいな感じになっていて。高校生のときは国際社会に興味を持った人たちが多いコースにいたので、みんな意識がすごい高かったけど、大学に来たら「ボランティアってすごい」みたいな感じで・・・。

今学期にサービスラーニングの授業をとったんですけど、授業の中ではボランティアの話をすごい楽しくできたけど、別の友だちに話すと距離がちょっと遠く感じるというか。ボランティアをするってことは当たり前だなって自分で思っているので、もっとそれが広がればいいなっていうのはすごい感じています。

林　なるほど。そうなんですね。みんな同じような経験や思いをしてきてますね。

さっき一成は、今仕事で消防設備の施工管理をやっていると言っていたけど、そういう職場ではどうなんですか。それこそ今 SLC-V の子たちがやってる防災意識を高めるとか、そういうこととかなり親和性が高い職業に就いていると思うんだけれど。

一成　ざっくり言っちゃえば、それこそ仕事なんですよね。そういう技術者たちの集まりだったりするので。そこに対して思い入れがある人はほとんどいない。俺自身も、その仕事を選んだからといって、防災とかそういうことにすごい関われるんだろうなと正直思ってはいなくて。できればお給料も必要なだけ稼ぎつつ、でも近い仕事にいたいなとは思ったんですけど、やっぱり現場はそうではないなと思いましたね。みんなみんながそういうことに興味があるわけでもないし、興味があるからこの仕事してるっていうわけでもないし。

林　なるほど。うーん。そうか。そうなんだね。

さて、これまで話が出たところだと、大学から社会に出て、特に SLC-V でいろいろ本当にそれこそ毎日毎日社会的な問題とかを話して、考えて動いてみたいなことをやってきて、いざ社会に出てみたら、さっきたかが言っていた「社会に出た方が社会との接点がなくなるんですよ」っていうところはみんな共通点としてあるんですかね。OG・OB のみなさんが今「うん。うん。」ってうなずいてるんですが。今日一番最初に話が出てきたメディアのあり方とか、それから教育っていうことばも出てきたと思うんですけど、そこらへんが今のみんなから見て課題なのかなっていう、そういう感じなんでしょうか。

開　あ、いいですか？今みんなの話聞いてて、「選挙に行ってみよう」とか「社会的な活動に加わろ

う」とか「ボランティアに行こう」とか、多分そういうのって、はじめに言ったように、もしかしたら震災の報道を見て、苦しんでいる人たちを見て、感情を揺さぶられて、やってみようって人けっこう多いと思うんですね。自分の考えなんですけど、何か行動を起こすときって頭で考えるってよりは、合理的とか理性とかってよりは、感情を揺さぶられて何かしようっていう方に動くと思うんで。そこはメディアの多分いいとこだと思うんです。

自分もそうでしたし。自分の親戚とかが福島にいたんで。恐怖心があって行動に移したっていうのもあるし。あと、知識もあるのか。「チェルノブイリ」の本とか読んでたりしてから。

人が共感したり、関心を持つことって、感情が先にきたらすごいと思うんです。大きい行動ができるっていうか。俺も、震災がある前に原発の安全性とか危険性っていうのはよく本とかで読んでたりはしたんですけど、そのときは多分頭で理解してた感じで。それが直接ああやって震災が起きて、自分の親戚とか、自分も、もしかしたらその影響があるかもしれないっていう恐怖とか焦り、国とかに対しての怒りとか、そういうものがやっぱり突き動かす。多分人を突き動かすんじゃないかなと。

そう考えると、今の在校生は、コロナでね、実際に経験したり体験できて感じられるものが少なくなっているっていうのはちょっと残念だよねって思いました。

林　本当ですね。全然動けないからね。それは OG・OB のみなさんがいたときとはやっぱり違っていて、もどかしいよね。なず菜もみゆきちゃんもね。みゆきちゃんのいるグローバル・コミュニケーション学群は留学が必須のはずなんですけどね。それもなかなか難しくなってるし。すごく時代が変わってしまったなという気はしますね。

一成　それこそ今の開さんのお話の中に出てましたけど、今こんな時代の中で、みゆきちゃんとかは何を求めて SLC-V に来たのかな？何がきっかけでこういう問題に興味を持ったのかな？あと、なず菜たちが残り１年ぐらいしかいれない中で、先輩たちに何を求めているのか。なず菜たちで言えば、それこそ後輩たちに何を求めているのか、これから先の展望とか。俺たちや学校に要望とか。SLC に対して、例えばこういうことやってみたいけどこれが足りなくてできないとか、困っているとかあったらぜひ聞きたい。興味がある。今のこの時代を踏まえて、今の自分たちの活動ややりたいことを踏まえながら聞きたいな、おふたりに。雑に振っちゃって申し訳ないんだけど。

林　ぜひ。

なず菜　今後のことについてはそうですね。私もあと１年しかいないので。

私たちの学年でも途中から入ってきたメンバーもいますし、フィールドワークに実際に行ったこともないメンバーもけっこういるんですね。１年生のみゆきちゃんたちもそうだし。現地に行って、肌で感じるっていうことができなくても、実際に先輩方のように東日本大震災に関するボランティアをされていたり、活動されいてた方の話とか、あと被災に遭った方のお話とかを聞ける機会をもちたいなあって。そういう聞く機会、聞いて、自分で考える機会っていうものをもっと増やしたいなっていうのはすごい思ってます。

今、本当にさっきも話した通り、メディアでの情報とかネットでの情報とかだけで。3.11 の震災は実際に経験してるっていっても、私たち小学４年生だったんですね。だからあんまり覚えていないっていう部分があるし。まだ子どもなのでテレビで見るけどあんまりわかっていない部分がすごいあった。

大人がいっぱい動いているけど子どもたちには全然わからない部分とかもあって。私たちは知らな

かったけど、実際こういうことがあったんだなとか、そういうのいっぱいあると思うので。知る機会はもっと増やしていきたいなと思います。
メンバーの中には、フィールドワークとか被災地に行って、実際に活動ができるから SLC-V に入ったっていう子もいたんですけど。結局コロナでできなくなっちゃって、抜けてしまう子もけっこういたので。一番は活動ができればいいんですけど、今ちょっとそれはね、私たちもどうすることもできないので。だから来年度は、実際に活動していた方とか、あと実際に被害に遭った方の話を聞くことで、メディアとかネットだけの情報では得られないことをお聞きする機会をつくっていきたいなと思っています。
林　ここまで話を聞いてくる中で、OG・OB のみんなはものすごく貴重な経験をしてきたので、これ財産ですよね、それを今の在校生に語り伝えていくっていうのはすごく大事だなって思った。今回試みで初めて座談会やってみたんだけど、みんなの話聞いてて途中から、もっと早くやった方が良かったんじゃないかって思い始めていて。
「自分たちが学生の頃はこういう活動をして、こういう方に出会って、今この方に会えるから」ってつないでいくってすごく大事ですよね。なず菜たちも多分きっと聞きたいだろうと思うし、この 10 年の間に関係が途切れつつある現地の方たちとももう一回つながり直せるっていうところもあるのかもしれないですね。
開　いや本当に。さっき一成くんが言ってたんですけど、やっぱ話せる場所、プラットフォームみたいなのを設けてくれてるっていうのがもう今回すごいありがたいなと思って、本当に感謝しています。
林　ありがとうございます。
一成　本当に俺が SLC-V に入ったとき、パワーのある人たちがいっぱいいて。SLC-V 創成期じゃないですけど、そういう人たちとの関わり、あるのにないというか。知る機会がなかったので今日の座談会みたいの撮り溜めていって、みんな見て戻ってきてみたいな。震災に関連することの話を「こんなことあったんだよ」みたいなことをしていってもおもしろいかなと思う。
林　色々できそうですね。今回の座談会をきっかけにね。プラットフォームっていうのはすごく重要だなと私も思う。みゆきちゃんはどうですか？さっきの一成からの問いかけについて。
みゆき　私が SLC-V に入ったきっかけは、もともと何かボランティアをしたいというふうに思っていて、団体というかサークルみたいなのを見つけていく中で、Twitter でアイリンブループロジェクトについて知って。今までそのプロジェクト自体も知らなかったし、東日本大震災についても、言い方悪いけど忘れてしまっていたというか。その中でもう一回考え直して、もっと知りたいなっていうふうに思ったのがきっかけです。
私が震災を経験したのは小学校２年生のときで、私は山梨県出身で遠く離れていたので、すごいことが起きたと思っていたけど、小学２年生でまだ何もできなくて。そしてその中でだんだん年を重ねるにつれ、東日本大震災の話はあんまり聞かなくなって・・・。そういうときにこの SLC-V に入って、あいりちゃんの話とか震災当時の話とか聞くことができて、実際に今行くことはできてないけれど、先輩方から当時の話とかを聞くことができているのはすごい勉強になっているなって感じています。
一成　それで、展望じゃないけど、行けるようになったら、あと行く以外でも、こういうことがしたいなとか、先輩たちを見てこれ真似したいなとか、似たようなことしたいなとか思ったりします

かね。

みゆき　やっぱり現地に実際に行って経験した人からお話を聞いたり、自分の目で見たりしなきゃ感じることができないものっていうのがあると思うので、現地に行ってお話を聞きたいなと思っています。

一成　この中でアイリンブループロジェクト知らない人もいるかな？なず菜、説明を・・・。

なず菜　あ、はい。東日本大震災のとき、宮城県石巻市で亡くなった女の子がいるんですけれども、その女の子はバスの火災で亡くなったんですね。地震があったとき子どもたちがバスに取り残されて。それで火事になって、逃げられなくて。その中にあいりちゃんっていう女の子がいたんです。亡くなってしまった後、あいりちゃんが亡くなったところにお花が咲いて。

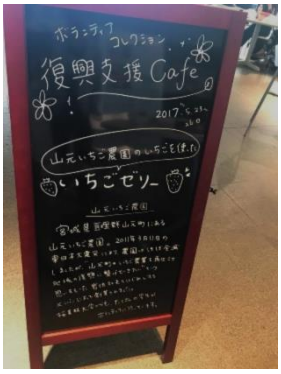
そのお花を全国で株分けして、震災のこと、こういうことがあったんだよって風化させない目的と、防災意識をもっと広めていこうということで始まったプロジェクトです。桜美林でも一成さんたちの代の SLC-V の先輩たちが株分けしてもらって。今大学の待望館の１階のところに「アイリンブルー・プロジェクト」っていう花壇をつくって、先輩方からずっと引き継いでるんです。

アイリンブルーブループロジェクトの代表の菅原さんという方と、あいりちゃんのお母さの美香さんという方がいらっしゃるんですけれども、今はその方を講師でお呼びして、一般公開でオンライン講演会というものを開催したり、毎週２～３回なんですけど水やりもしてます。

今年度はさっき言った防災教室の活動とかそういうのが多かったので、来年度はまた菅原さんと美香さんをお呼びしてオンライン講演会もいいですし、また違った形であいりちゃんのことを知ってもらう機会がつくれたらいいなって思ってます。メンバーの中でも、それこそ最近のミーティングでも、あいりちゃんを知ってもらう機会も増やしていこうねっていうふうに話してたところです。

林　今度ね、オンラインでやるときに先輩方にも声をかけれたりするといいですよね。

なず菜　そうですね。一成さんたちの最初のメンバーが、どういうきっかけで美香さんやあいりちゃんのこと、アイリンブループロジェクトのことを知ることになったのかとか、そういう話は他のメンバーはほぼ知らないと思うので、メンバーが知ることプラス他の人、一般の人とかにも知ってもらえるような機会をつくっていきたいなと思っています。



林　前の代のりほのときは、かなり活発に復興支援カフェをやってたんだけど、もしかしたらそういうのも知らないですかね？なず菜とかみゆきちゃんはね。

なず菜　シュシュカフェですか？

林　その前身だね。シュシュカフェに変えて、いろんな社会問題をテーマにして開いたり、他の団体とのコラボもするようになったんだよね。

一成　復興支援カフェは、月２ぐらいでやってましたよね？

りほ　そうですね。できるときは月２くらいで。写真展とかも。当時、現地のジャムを使ってお菓子をつくって提供してたんですけど、もうあのときから、このままジャム使い続けていいのかなとか、取り寄せて終わるだけ、提供して終わるだけになってしまいそうだなって危機感を持ってやり方を模索していたので、シュシュカフェに変えて

っていうそういう取り組みは大事かなと思います。

今日はみなさんとお話をして、私今は SNS をあんまり見なくなってしまったので、現メンバーの SLC-V の活動とかあんまり深く知らなくって、卒業生としてもっと知りたいなという思いとともに、でもどうかなって思いもありました。

文化祭で芋煮とかやってたと思うんですけど、卒業後２年間くらいしか文化祭に行ってなくて、そこである意味 SLC-V との接点を自分で離してしまった気がしていて。今日加奈さんにこういう機会をいただいて、現メンバーの気持ちとか、自分当時どう思っていたかなとか、そういうシェアの場ってすごく大事だなって思いました。もっと知りたいなって思いますし、みんな元気かなと思います。SLC-V のメンバーって、みなさんすごくアットホームで、社会問題に対していろんなアンテナをもった尊敬できる方が多かったので、今はどう思っているかすごい知りたいです

林　知りたいよね。だいぶ社会に出て丸くなってきてるとこもあるのかなと思いながら、ね (笑)。またみんなにいろいろ聞いてみたいなと思いますが、震災から 11 年ということで、OG・OB のみなさんは学生から社会人へと立場が変わったことから考えることがたくさんあるんだなって、今日は聞いてました。

では、最後、一言ずつ言って終わりにしましょう。今回はお声がけをしたのがみなさんだけだったんだけど、もっといろんな方にね、会いたいし聞きたいなと思うので、またこういう機会を企画していきたいなと思います。じゃあ最後一言ずつお願いします。

開　本当に今回ありがとうございました。こういう機会を設けてもらって、いろんな年代の SLC-V の活動とかやってきたことを聞けて、あらためて自分がやってきたことをふりかえることもできた。いろいろ話あったんですけど、社会に出てなかなか接点がなくなっちゃうとか、社会的な関心がなくなっちゃったりとか、自分もそうで。本当仕事が大変なときは正直あんまりテレビのニュースとか報道見ても全然何も関心がないときもあったんで。ただやっぱり自分の立場で、自分ができる範囲でやっていくっていうのが重要なのかなと思いますので、そういう感じでやっていこうかなと思ってます。ありがとうございます。

一成　今日はありがとうございました。しゃべり過ぎないようにしようと思ったんですけど、案の定しゃべってしまったので、もし次回があるのなら次は黙ってます！後輩たちの話とかもうちょっとね、聞ければよかったなあと思ったんですけどね、最後にちょっとだけ聞けてすごい良かったなあと思うし、本当そういう意味では先輩も後輩も関係なく、みんな話す場所とか動く場所っていうのを求めてるんだなとあらためて感じたので、老害になりすぎない程度にまた学祭に遊びに行ったりしたいなと思うし。出来れば OG・OB LINE とかもあるから、そういうところで何かしらみんなでまとまって集まりましょうよとか、現地に行きましょうよみたいのも、忙しいながらにどっかで組んでいけたらいいのかなと思います。

後輩たちとこういう座談会もどんどんやっていきたいなと思うんで、そのきっかけになればなと思います。老害にならない程度に（笑)。ありがとうございました。

林　ありがとうございます。先輩たちの当時の話を聞く会みたいのがイベントのひとつで上がってきてもいいかもしれないね。ぜひ企画を楽しみに！

りほ　今日はありがとうございました。こういう機会があって、震災から年月がたっても、コロナ禍っていう活動しづらい状況になっても、オンラインとか工夫されて意欲的に活動している現メンバーのなず菜ちゃんとみゆきちゃんのお話を聞けてすごくいいなって思いました。
私も、向き合い方は変わるんですけど、今のみなさんの活動を知りたいと思うのと同時に、今まで離れてしまったところがもったいないなってヒシヒシと感じていたので、あらためて、これまでの SLC-V の総勢メンバーの意見とか力を合わせたたらもっと進化したことができるじゃないかなって思いつつ、そういう機会を楽しみにしていたいと思います。貴重ですよね。つながり。もっと大切にしていきたいなと思っています。今日はありがとうございました。
たか　今日はありがとうございました。再び、当時のこととか思い出す機会なかなかないので、いろいろ考える機会を与えていただきました。
で、考えると、さっき社会との接点がなくなって、一見自分って完全にそこから離れてしまったように感じてたんですけど、でも思ってみると、今やってる教育活動が正直 SLC-V とささっこクラブの延長線上のものをやってたりするんですね。
引きこもりがちな生徒が多い学校なので、そこで自分たちで生徒会運営させて、自発的に。やらせるわけじゃなくて。加奈さん的な立ち回りですね。「なんかやりたいことないの？」とか。で、後輩ができるときに「ここどうなんだろう？って不安だから、一緒に体験授業やってあげようよ」とか。「立川の昭和記念公園借りて逃走中ってイベントやってみよう。それで縦の班分けして友だちつくろう」みたいなので動いてるんですね。いろいろヒントあるんですけど。
もともと SLC-V って、思い出したんですけど、「震災を風化させない」っていうテーマでしたよね？それは決して当時の痛みをずっと思い出すことだけじゃないし、直接的な復興支援をずーっとやり続けることでもなくて、それが種となってこれにつながってあれにつながって、形はどんどん変わっていっていいと思うんですよね。復興支援カフェがシュシュカフェになったりとか。今防災教育だったりとかしてますよね。もうどんどんどんどん変わってっていいと思うんですね。
そういう意味では、あらためて、こういう会話する機会は減ってしまったんですけど、つながってるんだなあっていうのを今思い出しながら感じました。
なので、次はもっと発信したりとか、一緒に話す機会っていうのが増えればもっとうれしいなあと思いました。なので加奈さんお願いします！調整。
林　はい。私（笑）？ありがとうございます。
たか　SLC-V のみんなもありがとうございます。ごめんなさい。OB、すげー話多いっしょ、長いでしょ！？なので、だから現役生の声を聞きたい！
林　SLC-V が当時、震災を風化させないっていうことと震災をきっかけに見えてきた社会問題について考えて動くことを目的に、2011 年の 4 月か 5 月にはもう動き出してたと思うんだけど、それが今たかが言ってくれてたみたいに、どんどんどんどん形を変えながらも今も続いているんだね。さっきたかが、「みんなの話を聞いている中で振り返ることができて、自分実は延長やってたんだ」って言ってたけど、それはすごく大きな気づきだよね。すごく素敵だなと思って聞いてました。

きっとみんなも多分そうなんじゃないかなと思うし、もしかしたら今の状況がつながってないかも

と思ったとしても、きっとまたね、今この現時点が人生のすべてってわけじゃないから、どんどんどんどんあのときやったことがずっとつながっているんだなっていうのは話を聞いていて思いました。

そうですね。なんかねできると。今ね、３月だからけっこう心の余裕があるんです私。でもまた 4 月になるともうわけわかんなく忙しくなっちゃうので（笑）。でも、毎年この２月、３月の私が動けそうなときに声をかけて、なんかやるっていうのもすごくいいかもしれないですね。では、次の方お願いします。

なず　ありがとうございました。コロナの関係で活動が制限されている中、こうやって先輩の話を聞くっていう機会は本当に貴重だと思うので、ぜひこれからも、私だけじゃなく他のメンバーも先輩たちとお話できる機会がつくれたらなあっていうふうに思いました。

今山田さんがおっしゃってたように、今までの SLC-V の歴史の中で色々変化している部分があると思うんですけど、自分が活動していく中で、今コロナっていう弊害もあるんですけど、今まで先輩たちがつくってきてくださった活動がどんどん減ってきちゃったり、どんどん変わってっちゃうことにちょっと抵抗感を持っていたので、先輩たちにそういうふうに言っていただけるのはすごいありがたいなって思いました。

今活動するのが難しいので SLC-V のみんなで勉強会とかを開いてるんですけれど、震災を真正面から見るだけじゃなくて、例えばジェンダー問題だったりとかそういう違う角度から震災を見ることでまた違った色んなことが学べるんじゃないかっていうふうに思って活動してます。でもそういうのが、今まで先輩たちが培ってきたものを壊してしまうんじゃないかっていう部分があったので、すごい今日はお話聞けてよかったです。これからもこういう機会があったらぜひ参加させていただきたいなと思いましたので、これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。

みゆき　今日は貴重なお話をありがとうございました。先輩方から当時のお話や思いが聞けたのはとても貴重で、すごく刺激的だったので、今日見えてきたメディアの課題とか、そういうものを見つめ直して、今後の SLC-V の活動でもっと当時の思いとかを発信できたらいいなと思います。ありがとうございました。

林　ありがとうございました。では、皆さん、今日はお休みのところ本当にありがとうございました。本当にすごくいい時間になって、もっと早くやればよかったねーと思いましたけど、絶対またやりますので、そのときはまたご協力ください。

（文字起こし：グローバル・コミュニケーション学群１年 SLC-V　羽尾 みゆき
編集：サービスラーニングセンター教員　林 加奈子）